信毎歌壇

小島　なお選

ふるさとへガイド付きなる研修会離れて以来の富士山の今日　（松本市）集　真藍

さりげなく閏日はあり字余りのまた字足らずのやうにきさらぎ　（長野市）風間　遥陽

ゲレンデに落し物ないと指導員されど句の種我拾うなり　（上田市）大久保幸吉

ボーゲンを身体語とするわたしだが滑りはじめはピザのピースで　（千曲市）大谷　善邦

ランドセル背負いしままで炬燵入る登校までと雪残る春　（千葉県船橋市）清水　渡

色褪せた手紙の束を見つければ四角い文字で愛を書く父　（茅野市）三好　碧

落書きの残れるままに回収の子供机は運ばれてゆく　（長野市）北沢　京子

チャーシューの裏表見て元通り先ずは麺から私の決まり　（長野市）宮沢　信博

やしょうまの花のもようの青のりの葉っぱばかりを食べる幼子　（小布施町）市村志津枝

わが庭のギョウジャニンニク青芽見ゆ今日は誰かに会える気がする　（長野市）せきたつお

佳作

山笑う候いかがお過ごしですか俺は元気だ夏には帰る　（佐久市）木内利一郎

釣瓶にて井戸から水を汲み上げしことなど我も忘れさうなり　（飯綱町）坂井　寿男

選評　第一首、就職先の研修会でふるさとへ。ガイドされずとも知り尽くしているけれど、今日の富士山はきっと新しい。第二首、例年よりはみ出しているような、でもやっぱり他の月に比べて足りないような不思議な閏（うるう）日。第三首、ゲレンデはたぶん句の種の宝庫。何もなさそうな場所から見つけるのがポイントだろう。第四首、身体になじんだボーゲンの語も、はじめは「カットピザの角度」だった。

米川 千嘉子 選

おかっぱでれんげ田にいる写真あり家庭訪問先生を待つ　（松本市）川久保恵子

あたふたと朝の小道を駆けてゆく剃刀負けの吾へ彼岸（かがん）西風　（小諸市）加藤　陽介

無言館に「あと五分」と出征間際の未完の絵見しより時を宝と生きん　（木祖村）佐々木千代子

観光か支援か我は迷いつつ地味な服装能登に行く旅　（長野市）松本　博人

去年から転院続く三か月名古屋・東京我は旅人　（木曽町）新村　亮三

息づかい胸で受け止め風呂上がり義母といつもの朝が始まる　（中野市）大坂くみ子

特養への思い届かず年老いし家族と生きる九十八歳　（南牧村）有坂たきの

図書館の大きな窓に降る雪を見つめていると来し方浮かぶ　（松川村）岡　豊村

段差だらけ築百五十年の家に住む上り下りもリハビリとして　（麻績村）塚原ふじ子

図書館が長期休みという知らせ水もごはんも無いに等しい　（塩尻市）丸山　葉子

佳作

「音楽に国境はなし」小澤氏は平和語りき熱き心で　（宮田村）小田切孝子

車から「やあ」と手を振る同級生ただそれだけで嬉しいものさ　（長野市）宮沢　信博

選評　第一首、昭和の懐かしい春がよみがえる。小学生が先生を待つうれしさと恥ずかしさも過去のものになってしまったか。第二首、お彼岸の頃の西風、「剃刀（かみそり）負け」に作者のちょっとした屈託がある。若々しくも巧みな歌。第三首、未完のまま絵筆を置かなければならなかった戦没画学生の無念。下句への展開が力強い。第四首、観光需要を促す「応援割」の旅だろうか。複雑な実感がある。

小池　光 選

冷蔵庫開けて取り出す物忘れ閉めてしばらく「そうだ梅干し」　（千曲市）上原　博司

父九十七歳にしてこんにゃくの嫌いなること明らかにせり　（長野市）原田りえ子

われ描きし露草の絵ををさなごは「ミッキーマウスの耳」と言ひたり　（飯山市）市村紀久子

雪の中とっとととんとキツツキのモールス信号「ハ・ル・チカシ」とふ　（茅野市）三好　碧

遠き日の入試の朝をふと思ふ姉編みくれし手袋はめて　（飯綱町）坂井　寿男

福寿草咲いて輝く庭見れば妻と植えた日偲ばれにけり　（松川村）岡　豊村

ほつほつと黄の芽の出でし山茱萸に三月の雪重く降りつむ　（松本市）倉科美恵子

廃校の庭に歌碑在り若き日に友と輝き歌った校歌　（小布施町）市村　憲彦

色あせしページめくれば押し花が甦りくるあの日あの時　（中野市）増田きみ江

隔木曜しぜんに早く起きたれどわが名は乗らず淋しかりけり　（佐久市）岩下　悦子

佳作

思慮深き母でありしが突然にあんたは誰と問われし彼の日　（東御市）土屋　桃江

久しぶり我の手作りレバニラでにんにく臭と笑顔が満ちる　（伊那市）赤羽　正彦

選評　第一首、年を重ねると万人がこうなる。冷蔵庫の扉開け、また閉めて、取り出すべきは梅干しだったと気づく。笑って済ませるよりない。大いに笑いましょう。第二首、父は実はこんにゃくが嫌いだった。97年間それを秘密にしていた。なかなか奥行きのあるふるまいではあるまいか。人生の謎に迫る一首。第三首、作者としてはガッカリかもしれないが、おさなごのこの言には鋭いものがある。